



TITLE:

# 脳科学と人格の概念 (<研究報告> 倫理学者のためのニューロエシッ クス)

AUTHOR(S):

永守, 伸年

---

CITATION:

永守, 伸年. 脳科学と人格の概念 (<研究報告> 倫理学者のためのニューロエシックス). 実践哲学研究 2007, 30: 147-162

ISSUE DATE:

2007

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/59253>

RIGHT:

# 脳科学と人格の概念

永守伸年

## はじめに

ファラーとハバーラインの論文「人格性と脳科学—自然化するのか、ニヒリズムに陥るのか」<sup>1</sup>は、これまで形而上学によって探究されてきた「人格 (person)」概念の内実を批判的に考察し、最新の脳科学の知見から人格性を客観性なき「錯覚 (illusion)」として退けようとするものである。マーサ・ファラーは実験心理学の分野でハーヴァード大学のPh.D.を取得後、認知科学と脳科学の観点から社会学的、倫理学的問題にアプローチしてきた。他方、アンドレア・ハバーラインはファラーのもとでペンシルバニア大学のPh.D.を取得し、顔面の表情や身体運動といった非言語的刺激を手がかりに脳科学の研究を続けている。さまざまな実験結果を駆使しつつ倫理学の基本問題に切り込んでゆく彼女たちの論文は、次のような手順において整理されることができだろう。

- (1) 人格は近代以降の倫理学に横たわる根本概念でありながら、かつて明確な客観的基準が与えられたことは無かった。

---

<sup>1</sup> M. J. Farah and A. S. Heberlein, "Personhood and Neuroscience: Naturalizing or Nihilating?," *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 37-48, 2007

- (2)他方、人格を大脳皮質のシステムとして自然化しようとする試みも、従来の心理学的、形而上学的アプローチを超えるものではない。
- (3)むしろ脳科学の明らかにするところによれば、人格は特定の刺激に応じて自動的にもたらされる脳の表象に過ぎない。
- (4)したがって人格は実在性と客観的基準を欠いた錯覚であり、倫理学の根本概念にふさわしくない概念である。

このような論旨には分野を問わずさまざまな応答が考えられるし、事実、ターゲット論文に寄せられた15本のコメントリーはそれぞれの視角から論文に批判的な検討をおこなっている。そこで、本報告は上に示した(1)から(4)の順序にしたがってターゲット論文を要約したのち、コメントリーのなかでもとくに有意義な論点を提供しているものを再構成することで、脳科学と人格概念をめぐる問題の輪郭を明らかにしたい。

## 1 ターゲット論文の概要

### 1.1 人格概念の曖昧さ

世界を理解するための基礎をなすような概念のなかには、たとえ日常生活で何の支障もなく使われていたとしても、その意味の確定や定式化において困難をきわめるものが多く含まれている。「時間」や「生命」といったものと同じく、「人格」もそのような概念に数えられるだろう。よく知られているように、人格なるものは6世紀に活躍したボエティウスの定式化にはじまりロック、カントを経て、近代以降の倫理学の基盤をなすに至った概念である。この概念は

おおむね知性や自己意識といった心の働きを特徴としており、たとえば、ロックにとっては「自分自身を自分だと考えることのできる知性あるもの」、カントにとっては「尊厳」を有する主体として物件と対比されるものであった。もちろん、人格を定義しようとする試みは今も続けられている。それは志向性、言語能力、時間感覚、はてはIQまで持ち込んで、さまざまな基準に応じた人格の解釈が乱立しているのである。

しかしこのように夥しい倫理学者の努力にもかかわらず、人格にとって決定的な基準が提示されたとはとても言いがたい。たしかに我々の直観は人格が世界に存在していることを告げてはいるけれども、じっさい、何が人格を人格たらしめているかはいまだ不明瞭にとどまっている。人格概念のどうにも悩ましい曖昧さは、そのボーダー・ラインが問われるとき、たとえば人工妊娠中絶、遷延性植物状態、あるいは動物愛護といった問題に際して浮き彫りになるだろう。だが、そもそも少なからぬ倫理学者が人格の基準を探求してきたのは、この概念が法的な権利の担い手であると同時に行為の責任を負う主体であり、人間の尊厳にとって根本をなすものとも考えられてきたからである。いわば人格は自律、正義といった概念と結びついて、倫理学の枠組みを支えてきたのだ。もし人格をめぐる問題が倫理学にとって抜き差しならないものならば、このような概念自体の曖昧さはいかにして考察され、対処されるべきだろうか？

## 1.2 人格概念の自然化

おそらくすぐに思いつくのは、脳科学の知見を援用しつつ、人格を自然化する戦略である。ここで「自然化 (naturalizing)」という言葉で表現されている方

法は、人格に対応する自然種が世界に存在していることを想定して、その客観的かつ生物学的な基準を明らかにすることにほかならない。しかし、そんな基準はどこに見出されるのか？ 当然、ロック以降の人格論の多くが知性、合理性、自己意識、言語能力といった心理学的要素を基準としているかぎり、これらの帰属する脳についての科学的研究が自然化プロジェクトのフィールドになるだろう。具体的には大脳皮質、とくに前頭葉が重要である。なぜなら、前頭葉は多岐にわたる脳のシステムにあって人間に特有の機能を受けもっており、人格に要請されるような高次の心理能力に関わっているからである。これらの能力に関して脳科学が果たした貢献として、例えば合理性や知性が記憶、抑制、自己監視といった諸要素に分解され、それぞれが前頭葉の各部に位置づけられたことが挙げられる。

たしかに、こういった自然化のプロジェクトは曖昧な心理的能力に科学的明晰さを与えるように思われるかもしれない。健常な脳の持ち主を人格に分類することはたやすいだろうし、皮質を除去された人を人格から排除することも納得できる。しかし、経験科学の発展やテクノロジーの成果が必ずしも明快な人格の基準をもたらさないことは、発展過程にある胎児に人格と非人格の線を引くことがなお難しいことを考えても明らかだ。つまり、人格概念の自然化はこれまでの心理学的基準を神経科学的基準に置き換えたに過ぎず、その原理的な問題はいっこうに解決されないまま残されているのである。脳のシステムのうちどれが他をさしおいて重要なのかはやはり不明瞭であるし、たとえそれが明らかになったとしても、当のシステムがどれほど機能すれば人格として認められるのかは曖昧にとどまる。したがって、もし脳科学が人格論に寄与できると

すれば、それは人格の何であるかを探求することではない。むしろ脳に関する経験的事実を手がかりにして、なぜ我々はこのように曖昧な人格の存在を直観してしまうのかを明らかにするべきだろう。

### 1.3 脳の表象としての人格

この問いに何らかの答を出すために、まず「我々が知覚し、理解するものは脳が表象したものにかざられる」という前提を確認しておこう。世界が人によってさまざまに経験されるのは脳の機能に違いがあるからであり、世界の理解に共通点が見出されるのは脳に共通した特徴があるからだ。この前提を受け入れるならば、脳にかんする科学研究は人格について次のことを明らかにするだろう。第一に、我々の脳は「人格表象のネットワーク」とよばれる特別の部位において、表情や身振りといった人間らしい (human-like) 特徴をもった刺激を表象している。このことは相貌失認の患者の観察、脳の神経画像、写真を用いた心理学の実験などによって示されており、たとえば側頭葉側面にある紡錘状回は、人間の顔に対して顕著に反応することで知られている。これらのネットワークは人間の容貌や行為を表象し、ほかの物の見かけや運動の表象は別のネットワークが担っているのである。

第二に、人格表象のネットワークは生得的に我々にそなわっており、我々の意図を超えて「自動的に (automatically)」機能している。つまり、いったん顔の表情や身振りといった刺激を脳が表象してしまうと、たとえそれがCGだとわかっていたとしても、我々はいやおうなくそこに人格性を認識せざるをえないのである。このことは同じく神経画像を用いた研究やさまざまな心理学上の実

験、幼児にかんする観察等々によって確かめられている。たとえばコンピューター・ゲームを使った行動経済学の実験は、スクリーン上に漫画の目が投影されただけで我々が寛大な戦略を採用するようになることを明らかにしているし、自閉症の患者についての比較研究は、人格ネットワークがある程度遺伝子レベルで決定されていることを示すだろう。まとめるならば、我々の脳は表情や運動といった人間らしい刺激を(1)人格ネットワークとよばれる特定の部位で、(2)自動的に表象するのである。

#### 1.4 人格は錯覚である

そうすると、人格の存在にかんする我々の確固たる直観に反して、それは特定の刺激に応じて脳が表象しているに過ぎないことになる。たしかに、脳に表象を引きおこす刺激が世界に存在する以上、人格性が「世界にある」(persons are “in the world”) ように思われるかもしれない。しかし、たとえばフロギストン説は自然世界の基本カテゴリーに対応していないことは今や明らかであるが、炎のような知覚的刺激に表象を喚起されたかつての科学者たちによって、その存在がかたく信じられていたことを思い起こそう。同じように、表情や目つきのように見誤りやすい特徴だけで、我々に人格の存在を確信させるには十分なのである。さらに人格表象のネットワークはほかのネットワークと隔たれているために、じっさいは人格の線引きが不可能にもかかわらず、我々は人格をもつものともたないものが別個に存在するように表象してしまう。そしてすでに述べたように、このネットワークは生得的かつ自動的に機能しており、我々はこれを抑制するすべを知らないのである。

したがって脳科学の知見を考慮するならば、人格は錯覚に過ぎないと主張できるだろう。我々は脳の特定のネットワークによって表象される錯覚にまどわされて、人格がたしかに世界に存在しており、人格ならざるものとの線引きが可能であるように思い込んでいるのである。おそらく、こうしたネットワークは我々の種がもっているすぐれて社会的な性質を反映し、進化の過程でそなわったものと思われる。人間の生存は同種とうまく関係を結ぶことにかかっており、同種の判別が難しいケース、すなわち人格の判断が曖昧であるようなケースは、テクノロジーの発展とともにもたらされたと言えるだろう。いずれにせよ、我々は錯覚に客観的な基準を求めることはできないし、錯覚を倫理学の根本概念に据えることも難しい。むしろ、倫理学者は何が、誰が人格であるかを考えるのをやめて功利主義的なアプローチを採用するほうが学問として生産的である。たとえ我々が日常的には人格を信じ、言葉を知らない赤ん坊に話しかけてしまうとしても。

## 2 コメントリーの検討

以上、要約したターゲット論文からは、さしあたって次の二点を認めるとする。まずこれまでの倫理学は、たしかに人格概念について明確な客観的基準を与えられなかった。そして脳科学によれば、人格性を表象するための何らかの機能が脳に見出される。これらを前提としたうえで、なお次のような仕方で論文を検討できるだろう。



- (1)そもそも人格の表象ネットワークの存在は、科学的にどれほど信憑性があるのか？
- (2)たとえ人格が脳の表象に過ぎないとしても、それは錯覚といえるのか？
- (3)たとえ人格が錯覚だったとしても、功利主義を採用すればうまくいくのか？
- (4)もし功利主義が採用されないならば、どのような代案が考えられるか？

本報告はそれぞれの問題に対応するコメンタリーをピック・アップして再構成し、最後に報告者自身のコメントを付すことで上の論点を明らかにしたい。具体的には、以下(1)人格ネットワークをめぐる脳科学内の反論（フェルプス）、(2)「錯覚」論法をめぐる認知科学的批判（パトリシア・チャーチランド）、(3)功利主義と人格概念をめぐる諸問題の指摘（ペリング）、(4)人格性にかんする社会哲学（サゴフ）、ならびに形而上学（グラノン）の見解を紹介する。

## **2.1 脳の人格ネットワークの存在は、現段階では十分に確証されていない。**

まず確認されるべきは、ターゲット論文の強調している「人格ネットワーク」というものが、現在の脳科学にあってどれほどの信頼性をもっているかである。この点にかんしては同じく脳科学を援用して社会科学の問題に切りこんでいる、フェルプスのコメンタリーを参照しよう。さて、ターゲット論文によれば人格ネットワークとは「人間の容貌や運動、思考を脳のそれぞれ異なった部位

において表象する」ネットワークであった。一方フェルプス<sup>2</sup>は、このネットワークの構成要素として挙げられている四つの部位、すなわち紡錘状回、内側前頭前野、前頭 - 側頭連結部、小脳扁桃の機能をそれぞれ詳しく検討することで、人格ネットワークの科学的な信頼性を明らかにしようとする。たしかにカンウィッシャーが論じているように<sup>3</sup>、論文の目玉としてスポットを浴びている紡錘状回にかんしては、人間の顔面に顕著な反応を示すことがfMRIを用いた実験によって証明されており、それが人格ネットワークの一翼を担うだけの機能をもっていることは疑いえない。

しかし最新の研究と照らしあわせるかぎり、ネットワークを構成する残りの部位に紡錘状回ほど十分な実験データが揃っているわけではないという。ここではフェルプスによってなされた検証の細部に立ち入ることはしないが、以下、簡潔にその内容を紹介しておこう。第一に内側前頭前野の機能はいまだ不明瞭なところが多く、血中酸素濃度を測定したクーパーの実験<sup>4</sup>は、この部位が必ずしも人格にかかわる反応に特化していないことを明らかにしている。第二に、前頭 - 側頭連結部は人格性との関係を論じるには実験数自体が不足している。第三に、小脳扁桃にかんしてはたしかに実験の方法、量ともに基準を満たしており、それが人間の社会性に決定的な役割を担っていることは間違いない。しかしフェルプスとレドックス<sup>5</sup>によれば、小脳扁桃は被験者に感情的反応を喚起するかぎり、およそ人格性とは無縁の刺激にも関係していることが示されてい

---

<sup>2</sup> C. Perring, "Against Scientism, For Personhood", *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 67-68, 2007

<sup>3</sup> N. Kanwisher, "What's in a face?", *Science*, 311, pp.617-618, 2006

<sup>4</sup> B. Knutson and J. C. Cooper, "Functional magnetic imaging of reward prediction", *Current Opinion in Neurobiology* 18, pp.655-663, 2006

<sup>5</sup> E. A. Phelps and J.E. LeDoux, "Natural Systems underlying emotion behavior: From animal models to human function", *Neuron*, 48, pp.175-187, 2005

るのである。したがって「人間の顔面認識システム」ならばいざしらず、現段階では「人格ネットワーク」のように包括的なものが脳科学にあって確証されているとはいいいがたい。

## **2.2 人格は脳の表象によってもたらされた曖昧な概念であるが、錯覚ではない。**

とはいえ、将来的にターゲット論文以上の根拠をもって人格ネットワークが裏付けられることは十分想定されるし、フェルプスが同意しているように、現在の脳科学でさえ「我々が人格性の錯覚をつくりだす傾向をもっていることは証明できる」のかもしれない。じっさい、論文の骨子をなしているのはネットワークのたんなる科学的検証ではない。むしろもっとも破壊的であり、それゆえ係争点となっているのは、脳の表象によってもたらされる人格が客観性を欠いた曖昧な概念であり、倫理学の基礎から退けられるべき「錯覚」に過ぎないという主張である。なるほど、我々の直観している人格がいかなる「客観的基準」も持っておらず、表情や身振りのようなミスリーディングな刺激にまどわされ、そのために「人格と非人格のあいだの線引きが原則的に不可能である」ことを認めるとしよう。しかしだからといって、この事実は人格性がまったくの錯覚に過ぎず、倫理学の基本概念としておよそ使い物にならないことを意味しているのだろうか？

このような「錯覚」論法にはさまざまに批判的なコメントが寄せられているが、とりわけ効果的な反論をおこなっているのがパトリシア・チャーチラ

ンド<sup>6</sup>である。彼女はロッシュ<sup>7</sup>の主張をふまえた上で、日常的に使用され、機能している概念が放射線状の構造をなしていることを指摘する。その構造の中心地点には概念の典型が集まっている一方、外側の境界線はそれほどにはっきりとしておらず曖昧にとどまっているという。たとえば林檎や蜜柑はフルーツの典型としてすぐに挙げられるけれども、カボチャは概念の境界線にあって線引きの難しい位置にある。しかしこうした事例をもってしても、我々は「フルーツ」が錯覚であるとは考えないだろう。このような概念の構造は「フルーツ」や「山」といった日常的なものだけでなく、ターゲット論文が「客観的実在性」<sup>8</sup>をもつカテゴリーとして挙げている「植物」においても、脳科学のターミノロジーである「表象」においても同様である。したがって、人格は脳の表象に過ぎないか、あるいは対応する自然種が見出されるかを問わず、概念であるかぎり曖昧さから逃れられないことになる。

### 2.3 人格の概念にまったく依存せずに、功利主義を採用することは難しい。

では、続いて「人格は錯覚である」という強い主張を「人格は学問の基礎となるには、多くのケースにおいてあまりに曖昧な概念である」と読みかえて、

---

<sup>6</sup> P. S. Churchland, "The Necessary-and-Sufficient Boondoggle", *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 54-55, 2007

<sup>7</sup> E. Rosch, "Natural Categories", *Cognitive Psychology* 4, pp.328-350, 1973

<sup>8</sup> 錯綜しているターゲット論文の「錯覚」をめぐる論証を整理すると、おそらく彼女たちはある概念が錯覚であるための条件として(1)客観的基準の欠如と(2)客観的実在性の欠如を念頭に置いており、(1)ならば(2)と推論していると思われる。この推論にたいしてチャーチランドは上に示したような反論を展開し、「明確な基準が欠如していることは、そのカテゴリーのメンバーが存在しているかどうかについて、何も含意していない」、すなわち(1)と(2)が別問題であることを指摘する。しかも、たとえ(2)を(1)と独立に論証しようとしたとしても、ターゲット論文は「実在性」の内実をほとんど明らかにしておらず、「自然種」や「自然のより説明的な構造 (more explanatory structure of nature)」といった概念もそれだけでは素朴な実在論が採用されているという以上の印象を与えるものではない。

そのうえでいかなる方策が採用されるべきかを考えてみよう。さしあたって確認されなければならないのは、ターゲット論文は人格性の曖昧さ、客観性の欠如を脳科学の観点から暴きたてることを主眼としながら、その実、たんにニヒリスティックな科学主義も退けていることである。その上で結論部において示唆されている唯一建設的な提案は、「人格性の基準を探し求めることの混乱を避け、人間性にかんする直観を脇におく必要性を理解することで、我々は万人の利害をみきわめつつこれらを保護することができる」、したがって「我々に許されたオルタナティブは、より功利主義的なアプローチに転じることである」、というものだ。もちろん、こうした議論には功利主義が人格概念に依拠していないことが大前提としてある。メグハーニ<sup>9</sup>の表現を借りるならば、ターゲット論文は最終的に「義務論や徳倫理学を放棄して、功利主義に身を投じる」ことを促すのである。

しかし、疑わしいのは功利主義と人格をめぐる論文の前提だろう。この論点について批判をくわえているペリング<sup>10</sup>、グラノン<sup>11</sup>の主張をまとめると次のようになる。たしかに、人格を倫理学の基礎にすえるのはカントを代表とする義務論であり、全体の幸福や選好にスポットをあてる功利主義はしばしばこれと対照的にとらえられている。だがこのことは、功利主義が人格概念に依拠しないことを示すものではない。なぜなら功利主義を採用したとしても、いったい誰の選好、誰の利害を重視すべきかがなお問われるからである。もし道徳性

---

<sup>9</sup> Z. Meghani, "Is Personhood an Illusion?", *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 62-63, 2007

<sup>10</sup> C. Perring, "Against Scientism, For Personhood", *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 67-68, 2007

<sup>11</sup> W. Glannon, "Persons, Metaphysics and Ethics", *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 27-40, 2007

を錯覚と認めたうえで功利主義に肩入れしようとするれば、人格のボーダー・ラインをめぐる難問がかたちを変えて突きつけられることになるだろう。現代の倫理学は方法論を問わず人格性の前提によって埋め尽くされており、この前提を放棄して功利主義を採用することは論文の見通し以上に困難なのである。

#### **2. 4 人格性の探求には、その社会的、ないし規範的性格を考慮する必要がある。**

そうすると功利主義以外の方法を考えた場合、我々は論文にどのような態度を取り、いかなる代案を出すことができるだろうか。コメンタリーから二つの戦略を示してみよう。第一に考えられるのは、規範概念の歴史的、文化的、社会的性格に注目することで、ターゲット論文の科学的スタンスから距離を取ろうとするものである。たとえばサゴフ<sup>12</sup>は、我々の「法的、政治的な生活を構成する」改訂可能な機能概念として人格を捉えなおし、その基準やじっさいの線引きは生物学や脳科学によって確定されるべきものではなく、むしろ広義の「反省的均衡」にゆだねるほかはないと主張する。たとえ客観的な基準を与えることが原理的に不可能だとしても、人格なるものが「ある集団の語彙においてどのように現れているか」、あるいは「社会的な相互作用にどれほどの影響を与えたり、混乱を及ぼしたりしているか」(バンジャ)を理解しさえすれば、それは権利や義務の担い手として機能するに十分なのである。論文の言葉を用いて言い換えよう。サゴフのような立場は人格を”human-like”な刺激に対応す

---

<sup>12</sup> M. Sagoff, “A Transcendental Argument for the Concept of Personhood in Neuroscience”, *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 72-73, 2007

る科学的なカテゴリーではなく、社会的文脈に応じて決定される「法廷的 forensic (ロック)」なカテゴリーとして強調するのである。

第二に、規範概念としての人格を脳科学の経験的探究から区別しようとする戦略が考えられる。このようなメタフィジカルな立場からなされたコメントリーは決して多くはなかったが、ここでは自己意識や道德判断の規範性に訴えて批判を展開しているグラノンの主張を紹介しよう。さてグラノンによれば、一般に道德判断が成立しているとき、我々は (1) どのような基盤をもって自分たちの規範的な主張、ないし行為を正当化しているのか、ならびに (2) 誰にたいして我々は責任を負い、称賛し、あるいは非難をしているのかを理解している必要がある。しかし、もし人格が錯覚として退けられるならば、これらの問いに応える「形而上学的基礎」が失われ、「道德判断の本質および内容」にかんする破壊的な懷疑が帰結しかねないという。こうした論証はいささか乱暴な印象を与えるかもしれないが、何も独断的な存在論が人格のために展開されているわけではない。グラノンは「行為に際して意識をもち、他人とかかわり、規範に服する」ために何が要請されているかに注意を促し、人格性を科学的事実から説明しようとするターゲット論文が「自然主義的誤謬のヴァリエーション」<sup>13</sup>をおかしていると論じているのである。

---

<sup>13</sup> 「自然主義的誤謬のヴァリエーション」という言葉自体は、同じくコメントリーを寄せているメイヤーズのものである。この点については次節でも検討するが、ここではターゲット論文を擁護するコメントリーの主旨も示しておきたい。たとえばラシーヌは脳科学の倫理学にたいするアプローチに一定の評価を下し「is/ought という根本的区別」を必要以上に振りかざすことは、「ought のうまれる具体的な源泉の存在を排除してしまうという、深刻な問題を抱えることになる」と論じている。E. Racine, “Identifying Challenges and Conditions for the Use of Neuroscience in Bioethics”, *The American Journal of Bioethics*, 7:1, 74-76, 2007 を参照。

### 3 むすび

以上の議論からも明らかなように、論文に寄せられたコメントリーは、おもに(1)人格を錯覚とみなす論法の妥当性、ならびに(2)科学主義に還元されない人格の多義性を係争点とするものであった。本報告はこれらの問題にあってコメントリーが触れていなかった論点をいくつか補足し、最後にターゲット論文から見出される意義を確認することでむすびに代えたい。まず「錯覚」にかんする議論については、チャーチランドを代表とする認知科学の知見のほかに、実在論、反実在論をめぐるメタ倫理学の論争も考慮されるべきだろう。たとえば、「ミスリーディングな外的刺激」や「人格ネットワーク」といった脳科学の見解をマッキーの提起している錯誤理論や投影説<sup>14</sup>と突きあわせることは、論証を洗練させ、その妥当性を考えてゆくために有用であると思われる。また、人格を論じる上でターゲット論文が看過しており（あるいは意図的に無視しており）、コメントリーの指摘も手薄だった論点を提供する古典として、ストローソンとパーフィットの仕事<sup>15</sup>を挙げることができる。たしかに人格は実践に応じてさまざまに解釈される「道徳理論の根本概念」ではあるが、同時に、デカルト以来の心身二元論に批判をくわえ、同一性の問いに答えようとする「形而上学的基礎」の役割も担ってきたのである。

とはいえ、このように人格の形而上学的側面ばかりを強調すること、あるいは人格への科学的なアプローチを「自然主義的誤謬のヴァリエーション」とし

---

<sup>14</sup> J. L. Mackie, *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Harmondsworth, Penguin: New York, 1977, 『倫理学:道徳を創造する』, 加藤尚武監訳, 1990

<sup>15</sup> P. Strawson, *Individuals*, Methuen, 1959, 『個体と主語』中村秀吉訳, みすず書房, 1979、D. Parfit, *Reasons and Persons*, Oxford University Press, 1984, 『理由と人格 非人格性の倫理へ』 森村進訳, 勁草書房, 1998 を参照。



て拒絶することは、必ずしもターゲット論文にたいする建設的な反応とは言えないだろう。なぜなら、論文は人格の規範性をやみくもに経験的事実に還元しようとしているのではなく、客観的基準をもちえないような類の規範的概念が、そのボーダー・ラインを問うケースにおいて無力であることを示そうとしているに過ぎないからである。なるほど、規範性を経験的事実に還元することはできないかもしれないが、他方、我々は事実を無視して突き付けられるような規範性も受け入れようとは思わないはずだ。この意味においてターゲット論文の意義は、「錯覚」をめぐる過激な論証よりもむしろ、脳科学の視角から人格に新たな光をあて、脳のネットワークをめぐる刺激的な材料を実践的問題に提示した点に見出されるだろう。もちろん脳科学の成果をまたなくとも、人格をめぐる「誤謬推理」はたとえばカントによって指摘されており、そこから「人格」という概念は、実践的使用にとって必要であり十分である」<sup>16</sup>という主張を繰り返すことはたやすい。しかし、ターゲット論文は脳のミスリーディングな表象である人格が少なくとも「十分ではない」ことを明らかにし、「実践的使用」に際して、規範的概念としての人格をさまざまな科学的事実と突き合わせてゆくことの必要性を示唆しているのである<sup>17</sup>。

(ながもり のぶとし 京都大学大学院文学研究科修士課程)

---

<sup>16</sup> I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, hrsg. von Jens Timmermann, Hamburg: Felix Meiner, 1998, A366を参照。カントは「人格の統一性を[...]実体の統一性から説明」(A690/B719)しようとする合理的心理学を超越的な「誤謬推理」として退けるが、人格の概念は「たんに超越論的であるかぎり」(A366)ア・プリオリに要請され、自由や道徳法則と結びついて実践的に使用されうると論じている。

<sup>17</sup> 本報告はこのような「突き合わせ」を詳しく論じることにはできないが、その一例としての場の報告における「キメラ」の問題を参照せよ。もし「人間以外の動物に人間の組織が移植された」キメラに人間の顔や手などの「表面的な、物理的外見」があらわれた場合、キメラが「人間の意識や人間特有の認知能力」をもっていなかったとしても、我々はなんらかの人間らしさをそこに認めざるをえず、したがって「そのようなキメラをつくりだす実験は、きわめて強力な理由がないかぎりなされるべきではない」のかもしれない。